

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼）淡水魚類調査

琵琶湖サイト

－滋賀県高島市、大津市－

琵琶湖は、日本最大の面積を誇る淡水の断層湖です。流入する一級河川は119本ありますが、流れ出る河川は淀川のみで、瀬田川、宇治川、淀川と名前を変えて大阪湾に注いでいます。古琵琶湖までさかのぼると約400数十万年、現在の湖盆が形成されてから約40万年の歴史をもつ世界有数の古代湖でもあります。そのため、多くの固有種が生息し、16の固有種・亜種を含む約70種の魚類が確認されています。琵琶湖は1950年に琵琶湖国定公園に指定され、1993年にラムサール条約登録湿地に指定されました。また、環境省の「重要湿地」にも選定されています。



調査地（和邇）の景観（2022年6月撮影）



定置網を回収する様子（2022年6月撮影）

2022年度の調査結果概要

琵琶湖サイトは、2016年以来、2巡目の調査となります。針江（高島市）と和邇（大津市）に設けた調査地点において、1回目の調査を6月29日～30日に、2回目の調査を12月8日～9日に実施しました。調査マニュアルに従い、定置網に入った魚類を回収し、種を同定した後、種ごとに個体数を数え、湿重量を測定しました。また、定置網で採集しにくい魚種を採集するため、投網とタモ網を用いた調査も行いました。なお、和邇では志賀町漁業協同組合の協力の下、エリで漁獲された魚類もサンプルとして提供いただきました。調査の結果、針江では16種、和邇では23種、合計で26種の魚類が確認されました。これらの中には、前回の調査と同様に環境省レッドリストに掲載されているホンモロコ・イサザ（絶滅危惧IA類）、ウツセミカジカ（絶滅危惧IB類）、ハス・スゴモロコ・ゼゼラ（絶滅危惧II類）等も含まれていました。その一方で、国内外来種のヌマチブや国外外来種のブルーギルとオオクチバス（いずれも特定外来生物）も確認されました。

【調査者・調査協力者】

渡辺勝敏・福家悠介・大貫溪介・野田勲寛・井戸啓太・橋口真実・小粥淳史・アジマン優仁・高田喜光（京都大学）、田畑諒一・長田智生・安川浩史・鈴木崇大・山口久瑠実・南條花菜子・寺嶋伊武樹・杉野 潤・武富鷹矢・今北大介（滋賀県立琵琶湖博物館）、金子誠也（日本国際湿地保全連合）



採集された魚類を種ごとに分ける様子（2022年12月撮影）



和邇のエリで漁獲されたアユ（2022年6月撮影）



ホンモロコ（2022年6月撮影）
絶滅危惧IA類



ハス（2022年6月撮影）
絶滅危惧II類

モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼）についてもっと知りたい方はこちらにアクセスしてください。

モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼・湿原）の過去の調査報告書
<https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

モニタリングサイト1000陸水域調査 淡水魚類調査マニュアル第2版
https://www.biodic.go.jp/moni1000/manual/LakeFreshwaterfishes_manual_ver2.pdf

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼）淡水魚類調査

鎮西湖サイト

－福岡県久留米市－

鎮西湖は筑後川と支流の巨瀬川との合流点付近に位置する、巨瀬川と水路で繋がる旧河道の河跡湖です。筑後川は阿蘇郡瀬の本高原を主な水源として、有明海に注ぐ一級河川です。鎮西湖は全長約600m、幅約100m程の小規模な湖沼ですが、筑後川や巨瀬川由来の魚類も確認されており、氾濫原水域としても重要な役割を担っています。きわめて止水的な環境で水位変動がほとんどなく、水深が一年を通じて安定しています。久留米市の「優れた生態系を有する地域」に選定されています。



鎮西湖の景観（2022年7月撮影）
湖辺にはヨシ等の抽水植物が見られました。



投網を打つ様子（2022年7月撮影）

2022年度の調査結果概要

鎮西湖サイトは、2016年以来、2巡目の調査となります。1回目の調査は7月13日から14日に、2回目の調査は12月1日から2日に実施しました。調査マニュアルに従い、定置網に入った魚類を回収し、種を同定した後、種ごとに個体数を数え、湿重量を測定しました。また、定置網で採集しにくい魚種を採集するため、投網とタモ網を用いた調査も行いました。

その結果、1回目の調査では21種、2回目の調査では14種、合計で22種の魚類が確認されました。前回と同様に環境省レッドリスト掲載種のニッポンバラタナゴ（絶滅危惧IA類）やツチフキ（絶滅危惧IB類）、ゼゼラ・ミナメダカ（絶滅危惧II類）が採集されました。また、ドンコとナマズが本調査では初めて確認されました。その一方で、国内外来種のゲンゴロウブナやハス、タモロコ、コウライモロコ他、国外外来種のブルーギルとオオクチバス（いずれも特定外来生物）も見られました。

【調査者・調査協力者】

中島 淳（福岡県保健環境研究所）、鬼倉徳雄・小山彰彦・水谷 宏・中塚宇宙・永江菜奈・百富修平・信澤 輝・中野一樹・松島宏太（九州大学）、金子誠也（日本国際湿地保全連合）



ニッポンバラタナゴ（2022年7月撮影）
絶滅危惧IA類。前回に引き続き確認されました。



モツゴ（2022年12月撮影）
個体数と湿重量で多くを占めていました。



ドンコ（2022年12月撮影）
本調査では初めて確認されました。



オオクチバス（2022年12月撮影）
前回と同様に採集されました。特定外来生物に指定されています。